

# 「2ちゃんねる」との対話

## ——新しい世論集団の可能性と問題点

後 藤 将 之

### 1. 経緯

80年代前半からマス・メディア研究に従事してきた人間としては異例かもしれないが、筆者がはじめて、インターネット巨大掲示板「2ちゃんねる」（以下「2ch」とも略記する）に触れたのは、9・11テロがまさに進行中の時だった。その夜、たまたまPCのモニター上で小さくテレビ放送を表示し、ニュースのチェックをはじめたところ、すでに緊急事態を告げる臨時ニュースが流れていた。まだWTCビルは倒壊していなかった。情報不足だったので、モニター上のテレビ画面を眺めながら、ネットで海外ニュースを検索した。「数人の死傷者が出ているらしい」というネット速報があったのを記憶している。この時点で、ネット検索に出てきたのが、当時から「便所の落書き」「痰壺」などと露悪的に自称していた（それゆえに筆者は接触しないようにしていた）「2ch」の書き込みだった。

進行中の事件について、1930年代にオーソン・ウェルズが起こした古典的な「火星からの侵入」事件を持ち出して、コメントしている書き込みに注意を引かれた。事態の推移を心配する多数の書き込みを読みながら、それが、日ごろ言われているほど、あるいは自称しているほどには「低劣な」書き込みばかりではないと感じ、興味を引かれた。

以来15年、ほとんど義務のようにして、「2ch」のニュース関係スレッドをチェックし続けてきた。その際、全ての書き込みに対して、何らかの「反論」を考え出すことを心がけつつ、この作業を続けてきた。それはほとんど、「対話」と言いたくなる経験だった。この期間を通して筆者は病気がちで、職場の仕事以外ではあまり外出もせず、人付き合

いも少なかった。そのためか、「2ch」（という匿名の存在）を相手に、在来マスコミとの距離を測りながら、時事や世相のニュースに関する対話をしてきた感がある。「2ch」の表現で言えば、「15年ほどROMってきた」ことになる（Read Only Memberの意）。筆者の場合、立場上、閲覧するのみであり、書き込みをしたことは絶えてない。

もともと問題含みのシステムであり、書き込み内容にも多くの問題点があると思うが、それらをおいても、色々な可能性を含んだ存在であるとも考えている。また、次のような「2ch」内での端的な指摘からも、これがまったくの「便所の落書き」でしかないわけではない意図も察知される。

「22 名前: ㍈ :2012/06/26 (火) 13:23:06.38 ID: xxx >>1 ソースも無しにほごくな 便所にもルールは有るぞ」

先入観に反して、このような良識的な出典重視の立場がみられることも多い。以下、「2ch」またはそれを代表例とする SNS の、新たな集合行動としての可能性と問題点について、マスコミ論と社会心理学の視点から論じる<sup>1)</sup>。デジタルメディアを論じる際には常にそうであるが、この作業によって、むしろ在来マス・メディアの特徴が浮き彫りにされてくることもあるだろう。

## 2. 月並みなハードウェアと例外的なアクセス規模

大前提として、そのシステム上の性質について概観しておく。「2ch」の情報内容を収容している（ホストしている）サーバー PC については、そのスペックが、「2ch」のサーバー会社において公開されている。また、どの板がどのサーバー上に収容されているかなどの情報も、基本的に公開されている<sup>2)</sup>。これらの情報を要約的に示せば、「2ch」の本体は、12台ほどの、ごく標準的なサーバー PC からなるシステムであり、全世界にある無数のレンタルサーバー・システムとほとんど変わるものではない。大手の通販やクラウドサービスが利用しているサーバーシステムと比較すれば、ごく小規模なものとすらいえる。ハードウェアとしての「2ch」そのものは、すべてのサーバー PC がそうであるように、「少し

高額な事業用パソコン 12 台が、ネットワーク機能とデータバックアップ機能を增強されたもの」という程度にすぎない。大型のラック 1 つに収まるほどのものですらありうる。しかし、現実の「2ch」がこれだけに尽きないのは、この月並みなデータシステムが、24 時間管理されつつ、大規模な高速ネットワークに常時接続されており、しかも、そのネットワークから、常に、大量の書き込みと読み出しがあるからである。

## 2-1 書き込み数と読み出し数

たとえば、本論のこの部分を書いている現在（2011 年 9 月 5 日午前 11 時 23 分）、「2ch」を構成する 12 台のサーバーには、本日午前零時から、すでに 87 万 4000 件を超える書き込みが投稿されている。ちなみに、読み出し（ページビュー単位）は、8271 万回を超えている（これらのデータもネット上に公開されている）。この数値は、夜にかけて急激に増加していく。もちろん複数回の投稿をする個人も多いし、インターネット関係のアクセス統計には、直感的に正確な意味が分かりにくいものも多い。それでも、どれほど大量のアクセスが、「2ch」を構成するサーバーに対して、日々生じているかが推測できるだろう。この、アクセス数の巨大さ＝いわば“人の出入り”の多さこそが、「2ch」の最大の特徴である。

かつて筆者が学部学生の頃、論文の資料調査目的で何度か出入りした 1970 年代末の朝日新聞東京本社の旧社屋（有楽町）は、古びた石造りの階段の 1 段 1 段の、その真ん中の部分が、どれも大きくすり減って、弓なりに凹んでいたと記憶する。気をつけないと、足を滑らせかねないほどだった。昭和 2（1927）年に建築されたその建物は、昭和 55（1980）年に同社が築地の新社屋へ移転したのち、取り壊されて現存しない。建築から半世紀を超える日々の繰り返しの中で、どれほどの数の記者や関係者たちが、あの階段を、物理的にもシンボリックな意味においても、駆け上り、駆け下り、あるいは飛び上がり、また転がり落ちていったら、石段にあれだけの摩滅が生じるのだろうか。そう考えて、当時まだ 20 歳だった筆者は、その階段の激しい摩滅ぶりにほとんど畏敬の念に近いものを感じたのを憶えている。まったく両極にあるかにも見えるこの両者にも、このような顕著な類似性が存在している。大量の情報がそこを經由していく、という事実である。

いま、「2ch」の中核にあるコンピュータ本体のハードウェア構成を概説しても、コンピュータに興味のない人々にとって、イメージ化の参考になる程度だろう。他方で、ある一日の前半が終わった時点で、87万件の書き込みが投稿され、さらにその百倍近い回数の閲覧アクセスがある掲示板という存在は、大いに驚嘆すべきものだろう（実際には、この「2ch」本体での数値に加え、第三者がこれから引用して作成する各種「まとめサイト」が存在し、アクセス数はさらに大きくなる）。ここに示されているのは、大量の、情報的な意味での「人々の出入りの記録」であり、それこそが、この社会サービスを、きわめて特異な存在たらしめているものに他ならない。「2ch」は集合行動の具体例であろう。

以上の文章を記したあと、約12時間後の2011年9月5日23時59分に、再度、「2ch」への書き込み件数と読み出し数を調べた。この日は同年9月最初の月曜日で、特記すべき事件としては、「台風被害で死者37人」「なでしこJAPAN、対豪戦に勝利」などがあつた。この日の終わり時点で、「2ch」への書き込み件数は277万件、読み出し数は2億1562万5000回程度だった<sup>3)</sup>。ある程度、大衆性の高いメディアといって差し支えないだろう。

### 3. 正当性の問題——在来メディアからの引用を中心に

「2ch」は、きわめて多岐にわたる話題を、「板」および「スレ」で扱っている。「板」および「スレ（スレッドの略語）」とは、「2ch」全体の階層構造を示す用語である。まず「2ch」の全体が、五十数個の大雑把な「カテゴリー」に分けられている。「ニュース」「世界情勢」などである。その各々が、さらに、数個から数十個の下位カテゴリーである「板」を含んでいる。「速報 headline」「イラク情勢」などである。さらにその「板」の各々が、数十から数百（時に1000を超える）の「スレ」に分けられる<sup>4)</sup>。

具体的には、「ニュース」カテゴリーの下位にある「速報 headline」という「板」の下位にある「スレ」のひとつが、例えば「908【速+】【エネルギー】再生エネ2030年に21%、政府目標達成へ……」というタイトルのものである。ここで、908は、その「板」内でのスレッド番号、「【速+】」というのは、もともと「ニュース速報+」板にあるス

レッドであることを示し、「【エネルギー】」は、話題の大雑把な区分である。その後の「再生エネ～」以下が、当該スレのタイトル（スレタイと略称される）である。スレタイはかなり自由に付加されている。本文が既存の報道からの引用であっても、スレタイは独自に付けられていることも多い。

これらのカテゴリー区分はかなり恣意的であるが、それについては別に検討する。本論で問題としているのは、これらの中でも、とりわけ、ニュース源を在来メディアにあおいでいるタイプのスレッド、つまりニュース系のスレである。筆者が常時チェックしているのも、「速報 headline」という、カテゴリーを横断して、新しく立ったスレッドばかりを集めてくる「板」であり、結果的には、そこから飛ばされる各カテゴリーのスレとなる。

在来メディアにおいて、ニュースを提供する活字メディアとしては、何よりも新聞と雑誌がある。これらが活字におけるジャーナリズムの中核をなしてきたといっても過言ではない。では、これら在来メディアにおけるニュースの扱いと、「2ch」におけるそれとの相違には、どのようなものがあるだろうか？

### 3-1 著作権法上の問題

しばしば指摘される「2ch」の問題点から論じる。つまり、その扱う「ニュース」の多くが、在来メディアからの引用にすぎず、独自取材に基づくものではない、ということである。ニュース系の多くのスレで、その冒頭部に引用されている記事は、在来のニュース報道網（NHK、五大在京ネットワークなど）や雑誌記事などで既報のニュース項目からの引用である。地方紙やNHKローカルニュースなどからの引用もないわけではない。とはいえ、「2ch」におけるニュース系スレの主要なニュース源は、在来メディアが、そのメディアにおいて公表した、既報の報道内容である。

しばしば批判されるように、もしこれが、「著作権のある既存コンテンツからの無断引用」と考えられるならば、著作権法上の規制に抵触する可能性がある。そもそも「2ch」内部にすら、以下のように、このことに関連した多くの書き込みが見られる。

「138 名前:名無しさん@ 12 周年 :2012/04/26 (木) 21:05:16.44 ID: xxx NHK の著作権無視して記事が無断引用してるスレにレスしてる奴が何言ってるの? 法を守る気あんの?」

「370 名前:忍法帖 :2013/04/24 (水) 18:14:04.64 ID: xxx 2ちゃんねる民はデジタル万引きをやめろ。新聞社の記者の記事を無断転載するのはデジタル万引き。新聞をスキャンしてアップロードするのはもっと犯罪。2ちゃんねる民はダブスタをやめて新聞社の記事を無断転載するのはやめろ。」

「30 名前:可愛い奥様 [sage] :2012/07/25 (水) 23:01:36.13 ID: xxx 注意 週刊誌記事のアップは全面的に禁止です。著作権法、出版社へのマナーを考慮してのことです。厳守してください。」

以上のように、「2ch」内部にも、既存報道をニュース源とすることについての問題意識は存在しているようだ(ただし、匿名掲示板であるために、そもそも「誰が」「どの程度まで真剣に」これらの書き込みをしているかは非常に判断しにくい)。これらが著作権法上の規制に抵触する可能性については、ここではあえて検討しない。一般にはそう危惧されることが多いだろうからである。ここでは反対に、規制に抵触しない可能性を考えてみる。

### 3-2 著作物としての範囲

はじめに、一般的な著作物であっても、報道や批評や研究その他の目的で必要な場合には、適正な範囲での引用が認められている(著作権法 32 条)。ただし、この場合の、「適正な範囲」ということが、いつも問題視される部分であろう。とりわけ、何よりもまず、「2ch」における「著作物」とは、どの「単位」か、という問題がありうるだろう。

すでに概説したように、「2ch」の基本的な構成単位は、一般ユーザーにとっては、基本的に、「カテゴリー」「板」「スレ」そして「レス」である。「2ch」内にしばしば書かれている説明によれば、1000 回の(または合計 500KB 以内の)「レス」群が、1「スレ」を構成し、これら「スレ」が不特定の一定数集まったものを、ひとつの「板」としてくくって

いる。さらに、既述のように、このような「板」を集めた「カテゴリー」が、現状では五十数個ある。このような3階層のファイル構造であろう。

ちなみに、この「カテゴリー」「板」「スレ」各々の内部における分類は、きわめて恣意的というか便宜的である。あまり体系的でも悉皆的でもない。おそらくは、書き込みニーズがある程度高いと判断された話題について、分類を追加してできたものと推測される。たとえば「学問・文系」「学問・理系」というカテゴリーがあるが、スポーツ科学専攻の学生がどこを参照したらいいかは分かりにくい（というか、そのためのカテゴリーは、同等の分類レベルには作られていない）。「趣味」カテゴリーの中に「トランプ」「ゾイド」などの板があるが、各種のカードゲーム類が悉皆的に分類されているわけでもない。

また、これらの区分は、実際には、非常に限定的な機能しか果たしていないように見える。というのも、何らかの重大な出来事や話題性のある事件が起こった場合、「それがどんな話題のスレだろうと、スレの流れを無視して、その出来事や事件についての書き込みが、勝手に行われる」ことや、「その出来事や事件で盛り上がっている別スレへ誘導するURLアドレスが貼られること」が常態だからである。もちろん全く無効ではないが、このように、「2ch」におけるカテゴリー区分（や、おそらく運営）というものは、かなり便宜的で場当たり的に行われている印象を与える。ただしまた、それが自由さの印象とも直結しているようである。スレの話題や進行を無視して書き込みが行われる結果、「2ch」では、特定の「板」「スレ」だけを取り出して、何らかの事件についての記述をそこから抽出する、といった作業が難しい。在来メディアでも報道されたことがあるが、凶悪事件などについて、もっとも活発な議論が行われるのが、「ニュース」板だけではなく、むしろ「カテゴリ雑談」カテゴリー内の「既婚女性」板（いわゆる鬼女板）であったりする。「2ch」では、「板」や「スレ」などの分類をあまり真剣に受け取っても仕方がないようにみえる。

このような分類の中で、「まとまった記述単位」としての性格をもっとも明瞭に持っているのが「スレ」であろう。「dat（データ）落ち」する（つまりアクセスが少なかったり、一杯になって一定期間経過したり、古くなったために、書き込みも参照も通常はできなくなる）のは、何らかの「スレ」単位であるし、ヘビーユーザーの誰か（しばしば固定ハン

ドルネーム＝「コテハン」で書き込んでいる）が「連投する」のも何らかの「スレ」であるし、ニュース系の場合なら、冒頭の「レス1」に引用されたニュース項目に対して、それ以降の999回（または500KB以内）の「レス」が、延々と付加されていくのも、この「スレ」単位である。「2ch」内部でも、「良スレ（良好なレスが多くある、良質のスレ）」「クズスレ（その反対）」といった表現が定着していることが、「スレ」がまとまった単位として意識されていることを示唆する。発生・消滅するのは基本的に「スレ」である。

そこで、もし「1つのスレ」を「1つのまとまった著作物」であると考えれば、ここでの問題は、「1スレ中における、既存の著作物（＝在来メディア報道記事）からの引用量は、はたして「適正な範囲」かどうか」という問題となる。既述のように、われわれが著作物を執筆するさい、一定の（一義的な定義は困難ながら）“適正量”の範囲内であれば、著作権のある既存の著作物からの引用が認められている。では、この「1スレにおける他の著作物からの引用の適正量」とは、具体的に、どの程度のものなのだろうか？

すでに触れたように、「2ch」における1スレのデータ容量の上限は、500KBとされている。単純に計算すれば、日本語の全角文字は、いわゆる2バイト文字（1文字についてメモリ2バイト分を必要とする記号。これに対して、半角アルファベットは1バイト文字）であるから、500KB＝500000バイトの2分の1、つまり全角25万文字分が（空白、スペースをも含めた）1スレ内での文字量の、理論上の上限となる。そして、この25万字ということは、400字詰め原稿用紙に換算して625枚であり、要するに、現状では、「2ch」における「1スレ」とは、最大値としておよそ薄めの新書2冊分、または、かなり厚めの単行本1冊分相当の文字量をもちうる、ということになる。ちなみに、1000回までのレスによっても1スレは完了する。500KBを1000レスで割れば、平均して500バイトつまり日本語の文字で250字であるから、250字のレスが1000回、書き込まれれば、1スレの容量が「完全に使い切られた」ことになるわけだろう。

これに対して、そこに引用される新聞、雑誌、テレビニュースの文字原稿などの、1ニュース項目あたりの文字数は、場合にもよるが、原稿用紙で数枚ほどが常識的な長さだろう。デジタルメディア以前に定式化



された在来メディアにおける報道フォーマットでは、それ以前から記者が使用していた 400 字（または半分の 200 字など）の原稿用紙を単位とした、「1 ニュース項目あたりの一般的な長さ」が、慣習的に用いられることが多い。

となると、「かなり厚めの単行本 1 冊中に、原稿用紙で数枚分の、既存メディアからの引用が 1 回あった」という場合、この引用の「数量」だけをもって、著作権の侵害といえるかは、おそらく議論のあるところだと考えられる。筆者は著作権法の専門家ではなく、いかなる法律の専門家でもないが、このあたりは、それほど間違っていない推測だろう。もしこれが間違っていると、もはや筆者などは論文の執筆が困難になってしまう。

「2ch」の「1 スレ」という軽い表現をしているが、その形式上の「可能な長さ」は、実際には、厚めの単行本 1 冊分に相当しうる。文字コードで代理される「文字」のデータは、デジタルデータとしての大きさが、しばしば驚くほど小さく感じられる。一例として、英語版のウィキペディアの文字情報だけなら圧縮形式で 1GB 少しのデータ量であり、SD メモリに簡単に収納できる（PDA に最新のウィキペディア全文を入れて携行する人もいる）。「2ch」の場合もこの類似例だろう。500KB と言っているが、20 世紀末ならば「フロッピーディスクの 3 分の 1 の情報量」と表現していた量であり、十分に書物 1 冊分のデータになったことが思い出されるだろう。

ちなみにもちろん、「2ch」のすべてのスレが、原稿用紙 600 枚以上の文字数をもっているわけではない。わずかのレスしか付かず落ちていくスレも多いし、無意味な定型文（誹謗中傷や卑語猥語の連呼など）の連投で埋め尽くされるスレもある（システム上は監視されているが、それらは、自動プログラムによる連続投稿の可能性すらある）。何よりも、1 回の書き込みが短文であることが多いので、500KB の文章量に達するずっと以前に、「1000 回のレス」という条件に達してしまう場合が、おそらく圧倒的に多いだろう。

また、現物をみたことがある方なら誰でも頷かれると思うが、「2ch」のスレにおいては、「同じ情報が繰り返し現れる」ことや、「よく似た情報が微妙に変化して何度も出現する」ことがままある。ほとんど口頭伝達を繰り返すうちに次第に変形していく流言と同様に、「2ch」の書き

込みレスは、よく似た情報の微妙な言い換えであることが多い。これらもまた、文字記号としては、1つのスレの情報容量を占有するわけだが、有意味な情報として議論に貢献し、争点のあいまいさを低減させることのない冗長な繰り返しである（ただし、重要な論点が何度も繰り返されて周知される報知効果はありうる）。こうした繰り返しを除外すれば、実質的な1スレの情報量は、はるかに低減する。

このあたりは、場合ごとに判断せざるをえないほどに偏差の大きな問題だろう。何スレ、何十スレにもわたって、比較的長文の書き込みを含んで、議論されつづけていく話題もあれば、1スレが埋まることなく落ちてしまう話題もある。誹謗中傷や卑語猥語の連投で最後まで埋め尽くされる（あるいは途中で放棄される）スレも多い（意図的なスレ潰しだともよく言われる）。そして、何十スレと続いている話題にしても、書き込む話題のネタ切れというか、同じ指摘や主張が、延々と繰り返されるだけのことも多い。この場合には、ニュース関心は依然として高い（したがってアクセスや書き込みは続く）が、新しい情報や報道が提供されないため、ニュース欲求の充足されないユーザーによる、空想や予断を含んだ、冗長で感情的な繰り返しが続くことになっているのだろう。

そして当然ながら、「2ch」の運営システムも、基本的には、「書き込みが続く」ことをもって「スレの継続条件」としている。冗長な繰り返し文であっても、それだけでは、スレが落ちる主因とはならない（ただし、「2ch」では、人力でのスレ管理も行われるので、人間の判断も介入しているものと推定される）。

以上から考えると、もしあるスレが「良スレ」であって、可能な長さの25万字のほとんどが、各投稿者からの独自の指摘や考察、意見などで埋まっている場合、その原稿用紙600枚分の1スレ中に、議論のきっかけとして、原稿用紙数枚分の報道記事が冒頭に無断引用されていたとしても、それは本来、問題視されるべき性質のものではなく、引用の適正量の範囲であろう。むしろ、それだけの議論を触発したポテンシャルを持っていた事実をもって瞑すべき事柄だと考えられる。問題なのは、現状で、それだけの「良スレ」がなかなかみられないという現実であろう（もちろん、ただ長いだけが「良スレ」の条件でもないわけだが）。

ちなみにこのような場合、その「良スレ」の著作権者は、「2ch」の運営主体ということになるだろう（もちろん全ての「2ch」スレの著作

権者は運営主体だろう。また個々の投稿については、個々の投稿者にも著作権がある)。この場合、そのスレは、つまり「1つのニュース記事を議論のきっかけとして、匿名のボランティア多数が、無賃金・自己負担で共同執筆した著作物」という位置づけになりうるだろう。

なお、以上とはやや議論の水準が異なるが、在来メディアである新聞や雑誌の場合、いわゆる「回読率」という市場調査上の考え方があることも指摘されるべきだろう。「回読率」とは、「ある雑誌や新聞など印刷メディアの1つの現物(1コピー)が、実際には何人分の読者数を持っているか」を調査した数値である。子供向けのマンガ雑誌などは、友達同士で「回し読み」される。その「回し読み」の程度が「回読率」だといえる。あるマンガ週刊誌の特定の現物を、平均して、所有者に加えて周囲の5人が「回読」した場合、「その雑誌のその号は回読率が6.0である」などと計算していた。

回読率が高いコンテンツは、一般に、そうでないコンテンツよりも、社会的な影響力が大きいとされる(広く読まれているから。そもそも科学系の学術論文などでは、引用回数こそがその論文の重要性の尺度であることも多い)。この意味からは、いわば「人口に膾炙してネット上で頻繁に準拠された」報道内容は、(単純な売り上げ部数に尽きない)影響力を(またおそらくは「価値」をも)増大させているとみられる。

回読率は、広告効果の見地からは、高い方が望ましい(1つの現物だけで、数人への効果が期待される)。他方で、コンテンツ販売の見地からは、同一コピーを何人かが閲読視聴すると販売量が減少するため、必ずしも望まれない。つまり、メディア経営における「広告収入志向」と「内容販売志向」とが対立しうる地点が、この「回読率」である。回読率を低く制限しても(何らかの手段で回し読み困難としても)、それがそのまま実売部数の増大に直結はしない。借りて回し読みできないなら、読むのをやめてしまう読者層が存在するからだ。ただし、何よりも販売収入を、広告収入より優先的に考えるなら、回読を制限することは実際の考え方ではありうる。

「2ch」での記事引用などの場合、そこに併載された新聞・雑誌広告までが無断引用されることは(紙面そのものを撮影して画像をアップする=本来の意味での「デジタル万引き」をしない限り)、あまりみられない。その意味では、広告効果への直接の影響はおそらくない。むしろ

販売量が低下するという悪影響があるだけの可能性もある。ただし、「ネット世評」は、結果的に、一定の広告効果を発揮することもありうる。

「24 名前:可愛い奥様[sage]:2012/07/26(木)16:05:03.46 ID:xxx 文春買いなはれ。売り上げ協力してあげるとこの事件扱い続けてくれるかもしれないし」

上の例では、注目されていた事件について、多くの記事を掲載した週刊誌の当該号を購入することで、以後も継続してそれが報道されることが期待されており、そのために、当該週刊誌を購入して、いわば編集方針への支持を表明することが推奨されている。定期購読ではない雑誌などの場合、このような「ネット世評」は、売り上げに影響する広告効果を持つ可能性がある。だからといって、紙誌面からの大々的な引用が容認されるわけではないが、あまりに紙誌面の回読的な行為（この場合には「2ch」上への引用と、そこでの閲覧）の可能性を限定しようとすることもまた、現実的ではないだろう。

### 3-3 著作権法の対象に該当するか

さらに、現行の著作権法の考え方でも、「雑報・時事の報道」の扱いは、いささか微妙なものとされている。これは重要な論点であるが、法律上の議論なので、筆者は詳細には立ち入れない。ただし、以前から、しばしばマスコミ研究でも語られてきたものである。

要約的に示せば、著作権法の保護対象である著作物とは、「思想又は感情を創作的に表現したもの」（第2条1項）、すなわち創作物である。そして、「事実の伝達にすぎない雑報及び時事の報道は、前項第一号の掲げる著作物に該当しない」（第10条2項）とされる。すなわち、この意味でのニュースは著作物ではない。だが、「この規定を拡大解釈すると、事実を中心に報道される多くの新聞記事に著作権が発生しないとされてしまうおそれがある。しかし新聞記事の多くは事件の選択、情勢分析、評価、文章上の工夫等が加わっているため、思想・感情が表現されており、著作物性を認めるべきである」。従って、「死亡広告……や人事異動など単なる事実のみを記述した記事、あるいは表現の選択の幅の狭

いニュース記事の見出しそのものは、……著作物性が否定されるものの、記事一般には著作物性を認めるべきである」とされる。けれどもまた、「雑報・時事の報道については、誰が書いても同じようなものにならざるをえず、選択の幅が狭いという観点から創作性が否定される結果、著作物性が否定されると考えることも可能である。……著作物性が認められる新聞記事の中から事実だけを利用して自分の文章で書いた場合には、当該事実は著作権法で保護されるものではなく、著作権侵害とはならない」ともされている（以上は、中山、2007、38-40 頁。中山、第2 版、2014、49-51 頁も同様の論調である）。

以上のように、実は、ニュース報道が「事実報道」に徹すればそれだけ、その結果としてのニュース記事は、著作物性を希薄にしていく。ジャーナリズムとしてのニュース報道は、しばしば「事実の報知」と「それへの論評」から成り立つが、この意味では、明示的な論評性を控えた、事実報知のみの報道活動は、みずからの著作物性を危うくする行為だともいえる。また、事実の選択的な構成が創作的な営為でありうるにしても、それを過度に実施しては、その結果産物は、つまり創作物となってしまう、今度はそれを事実と呼べるかが問題化するだろう。ここ数十年間支配的な「客観報道」の姿勢が志向している方向も、多くの読者が求めている「確実な事実の適切な報知」という方向も、このような、「表現活動ならざる、単純明快な雑報・時事の報道」をこそ求めていることも事実だろう。

この辺りは、従来から、ジャーナリズムのジレンマとして、しばしば当事者たちによって慨嘆されてきた問題だった。どれほどすばらしいスクープを放っても、周到な調査の結果として重大な事実を発掘しても、それが、客観的な 5W1H の事実報道であればそれだけ、その著作権は認められにくくなる。事実には著作権はないので、それまで一般に知られていなかった事実であっても、その報道には、とりたてて著作権は発生しないはずである。それは、ただ知られるべきものである。

結局のところ、報道のための調査とは、本質的に報われない（というか、それをなし遂げた直接の個人が明示的に褒賞されにくい）営為であって、ただ、それが社会に反映された結果を通してのみ、非人称的な満足を与えるだけの、自己犠牲的または禁欲的な社会活動となりがちである。ジャーナリストが無冠の王者であるというのは、このような、本

質的に報われない作業を遂行しつづける、しかもあえてその道を選んだ、無名の「成り立たない勝者たち」への、はなむけの表現でもあった。この業界の従事者は、「情熱的なニヒリズム」と呼ぶ他にないような独特の屈折した性格を共有していることが多いが、それは、報道活動の置かれた以上の基本的な立場に起因する場合が多かった。とはいえこのことは、最終的に、「他人の事情、他人の事実」に鼻を突っ込んでいる取材活動には不可避のジレンマともいえる。また、本当に価値や影響力を持った取材内容は、その後、結果的に書籍化などされることで、当事者への報酬や栄冠となってきた。このあたりは、必ずしも経営的配慮に尽きない、職業倫理の問題だろう。

確実に言えるのは、それほど創作性や選択性の高くない時事の報道については、必ずしも引用を制約されにくい、ということだろう。重要な事実は知られるべきものである。いかに貴重な事実が掘り起こされても、それを知り、話題にしようという意欲のある受け手が存在しない限り、それは社会的な影響力を持ちにくいからでもある。

あくまで程度問題ではあるが、以上の事情からも、事実在即した報道内容が、「2ch」に限らず、各所で（しばしば暗誦や口承などによる無償の伝達によって）話題にされ、拡散していくことは、在来マス・メディアの影響力にとっても必ずしも悪いことばかりではないはずである。

#### 4. 集合行動としての位置

「2ch」が社会の中でなんらかの有効な機能を担いうるのかについては、「2ch」内部においても、様々な立場があるようだ。

「56 名前:名無しさん@13周年@転載禁止[sage]:2014/04/20(日) 18:15:00.07 ID:xxx 久しぶりに覗いてみたが、相変わらずだなつか、101スレも伸ばしても社会的影響なんかひとつもないだろうに俺様の声を聞けってか?w 2chのスレなんてだーれも影響受けないのになw そもそも真面目な人々は覗かないからなあ」

「303 名前:名無しさん@13周年:2013/06/02(日) 15:47:48.52 ID:xxx お前ら右かな[右翼の意、筆者補足]。違うんじゃないか。単

なる馬鹿。衆愚。自らが意見などという高尚な概念を形成し得る人間だと思ふのは傲慢だ。己の馬鹿さを知るべき土人。」

「21 名前:オレオレ!オレだよ、名無しだよ!! :2013/05/18 (土) 21:17:17.91 0 >>10 自浄かどうかかわらんが、大手新聞はかなりネットの書き込みに敏感になってきてる気がする。便所の落書きも、無視できない力になりつつあるんだなw」(以上、wは(笑)の略)。

衆愚であろうと社会的影響がなかりうと、前述した数量の書き込みと閲覧が持続的に続いている媒体は、ほぼ確実にマス媒体ではあるだろう。この全てが、数人から数十人の書き込み部隊による自作自演だとは考えるにくい<sup>5)</sup>。そのようなマス媒体の利用者は、少なくとも大衆であり、大衆の行う非制度的な行動は、集合行動として把握される。集合行動といっても各種あり、それぞれに特徴がある(要約的には、後藤、1991などを参照)。たとえば「2ch」の書き込みをする人々が、物理的にどこかの場所に集合することもないわけではない(ネット用語ではオフ会と呼ばれる対面的な集まり)。また、デモやストライキなどの意思表示や示威行動を行うことも、全くないわけではないだろう。とはいえ、基本的に匿名者相互のネット書き込みである「2ch」投稿者たちが、そのままで、これらのような、具体的・物理的な集合行動を起こす、つまり集团的・群集的な集まりを形成することは、現状それほど一般的ではないようだ。

もう少し確実なのは、「2ch」そのものが、何らかの世論を担いうる世論集団として機能しはじめている可能性だろう。「2ch」には、国内外の多様な場所からの書き込みがみられる。その意味で、物理的に集合して存在している人々ではないので、物理的な意味での「公的集まり public gathering」として扱うことはやや難しい。しかし、そもそも「2ch」そのものが、各所から投稿された意見や主張を含むことは確実だろう。しかし、それがそのまま世論を形成するかというと、必ずしもそうは言えない。

#### 4-1 「2ch」と世論の条件

多くの集合行動のうち、世論ほど、その定義が多岐にわたる概念も少



ない。「そもそも世論が何であるか」をめぐる、これまでも大量の論文や書物が刊行されている。実際のところ、世論の定義を検討するだけでもゆうに1書が必要となるほど、その定義は確定していない。社会心理学領域だけでも、方法論的個人主義的なフロイド・オールポート、サーベイ調査第一主義のジョージ・ギャラップ、世論集団を重視したハーバート・ブルーマーといった論者たちの「世論」定義は、それぞれが大きく異なっている。

ここでは、「世論」の概念をレビューすることは別の機会とし、むしろ、筆者がかつて提出した「世論」概念に依拠して議論を進めていく。筆者による「世論」の定義とは、すなわち、「二次以上の共志向をされた意見」ということである。

筆者は、世論に対する「チャンネル中心主義」の立場をとっている。すなわち、一定の社会問題が存在するとき、それへの対立する見解がみられる。このような「争点 issue」の情報は、「個人意見 personal opinion」「世論 public opinion」および「制度 institution」という、形式化の度合いで区別される3種類がありうる。「個人意見」は、個々人が内心で抱く私的見解やつぶやき程度の公式性しかもたない。「世論」は、最低限2人、多くはそれ以上の個人の間で共有される公的意見を意味し、個人意見よりも形式性が高く、固定的・行動拘束的である。そのような世論が、「制度」として固定化されると、それは服従・非服従に対する標準化された賞罰を伴い、高い安定性と行動拘束性・規範性を持つようになる。各々のレベルの情報は、それに相応する特化した情報チャンネルで流通することが多いが、複数のレベルの情報が混在して流通するチャンネルもある。

具体的に説明すれば、同一の意見（例えば「禁煙すべきだ」など）であっても、個人が街路で相手に対してつぶやく場合（個人意見のチャンネル）と、職場で複数人が一団となって要求する場合（世論のチャンネル）と、街路に禁煙標識として掲示される場合（制度のチャンネル）とでは、同一の指示内容であっても、拘束力はこの順で高くなる。より制度化されたチャンネルを流れる「争点に関する見解」は、より形式性と拘束性を強める傾向がある（後藤、1990、2005 など）。

続いて、「世論」レベルまで形式化した情報には、「二次以上の共志向をされている」という特徴がある。「共志向 co-orientation」は、セオド



ア・ニューカムが主に展開した概念であるが、「ある個人Aが、別の個人B及び、対象Xの双方に志向している（注意を払っている）」状態のことを意味する。Bも、A及びXについて、同様の共志向状態にあるとき、AとBの間で、Xについてのコミュニケーションが可能である。これらの対人認知および対物認知は、不正確や不整合である可能性があり、その場合には、そのコミュニケーションも不正確や不整合なものとなる。だが少なくとも、A、B、Xの間に、上のような共志向関係が成り立っていない限り、そもそもAとBの間でのXに関するコミュニケーションは成り立たない。以上が「一次の」共志向状態と筆者が呼んでいる、対人・対物関係である。A-B-Xモデルとも呼ばれる。

ついで、筆者が言う「二次の共志向状態」とは、「一次の共志向状態についての、共志向的な理解」のことである。例えば、ある争点Xについて、AとBとが、それぞれの意見を持ち、かつ、AとBとは相互に相手を意識している（ここまでの一次の共志向）。さらに、AとBはそれぞれ、「相手が抱いている意見」についても推測し合う（これが二次の共志向）。つまり、両者が、「自分がXと相手について意見を持ち、かつ、〈相手がXと自分について持つ意見〉についての推測をも持っている」時、二次の共志向状態が成立する。両者が、「自分はこれこれと考え、かつ、相手はこれこれと考えていると推測している」状態である。世論は、複数人の間で成立する何らかの対象についての意見の共有（合意）を必要とするから、「自分が考えていること」のみならず、「相手の考えていることの推測」までがそこに含まれなければ、最低限、成立しがたい。このような、意見の共有についての推測が存在することで、公的意見の安定性がもたらされる。「両者が一致して、当該意見に同意している」という印象によって、世論（や制度）の安定性が生じる。以上を換言して、「二次以上の共志向をされた意見」のことを「世論」と呼んでいる。

可能であれば、「相手の意見の推測」も、正確であることが望まれる。この場合には、自己意見と他者意見が正確に理解されるので、意見は世論として安定的に合意されうる。このような「世論」定義からみた時、「2ch」は世論として成立しているだろうか？

#### 4-2 1/2の世論

以上の議論からすれば、「2ch」が、しばしば「世論」の水準にある争点チャンネルであることには、ほぼ疑いの余地がない（相手を意識しない「喚き」のような私的書き込みや、地震速報などの制度情報を例外として）。そこには2人以上の個人が関与して、一定の話題についての議論を行っているからだ。そこではしばしば、「ネット世論」といった言葉や、次のような意見すら聞かれる。

「302 名前:名無しさん@13周年[sage]:2013/04/24(水) 17:58:29.77 ID:xxx 誰かが書いたものを誰かが補完しさらに精度を増して流布される 最終的に個の意見は淘汰されて集合体の総意になる 新聞はどこまで行っても個人の感想文にすぎない」

集合行動、意見の一般化および新聞の社会組織について、やや誤解のある指摘だとは思いますが、意図することはうかがえる。端的に「2ch」（のある部分）的な指摘であろう。しかし、では、「2ch」が、上に筆者のいう意味での十分な世論を構成しえているかといえば、そうとは言えない。このことは、(1) 相互の匿名性、および(2) 相互の意見の信憑性の曖昧さ、の2点から生じるものである。

第一の点は、これまで「2ch」についてしばしば指摘されてきた問題点である。社会的弱者の発言はしばしば、匿名扱いされることで当事者が保護される。選挙における無記名投票なども同様の論理から実施されている。立場が弱くても、あるいは投票結果で敗北しても、その後にわたり不利をこうむらないための配慮から行われる。ネット掲示板に書き込むことだけで関係している不特定多数の人々、という存在も、多くの場合、広義の社会的弱者というか無力な一般人であり、特権的な強者ではありそうもない。従って、匿名の「便所の落書き」が社会への鬱憤晴らしに使われても無理はない、ということになる。必ずしも望ましいこととも思わないが、江戸時代の落書（吉原、1999）などを実例として、このようなメカニズムは、多くの社会で機能している<sup>6)</sup>。

ところで、個人意見が世論を経由して制度へと結晶化していく過程は、関係者相互による確認（意見の内容確認と当事者の人員・意向確認）の

過程をへて、意見がいつそう堅固に支持されるようになる過程でもある。この過程において、意見の内容が合意されるのみならず、「誰が、どのように」合意したかまでが、再三、確認される。確実な参加者同士が、確実に合意しあっている事実がなければ、意見が正統に世論化すること、世論が制度化することも容易ではない。そうでない意見や世論は、支持や後ろ盾が弱く、信頼されにくいからだ。ところが、匿名の書き込みのみから成り立つ「2ch」の合意形成システムでは、この部分での「参加者の意向確認」がきわめて難しい。匿名者同士の意思決定は、どうしても拘束性が低く、その意味で、堅固な合意が達成されにくい。発言なら容易であるが。

第二に、以上の困難性があることに加えて、そもそも「2ch」自体が、意見の真実性をそれほど重要視しない風土を持っている。それはしばしば、デマや誹謗中傷の温床である。そのような場所じたいは程度問題だが社会に必要とされているので、「2ch」がそうした性質を持っていることを、ここで議論しても仕方がない（筆者などはむしろ、そのような曖昧な性質をもたないよく管理されたネット掲示板をみると、人工的な意図が気になってしまう）。

であるにしろ、このような、真偽性の曖昧さをも売りにしているような掲示板では、合理的な議論に依拠した意思決定としての世論形成が、基本的に困難である。第一の限定条件だけでも人を躊躇させるのに充分だが、そこに第二のそれが加わると、「無視するのが安全」という処世訓が登場しないわけにいかない。以上から、「2ch」が世論を担うとしても、半分（＝対物志向性）しか充分には成立しにくい世論であろうと考えられる（それでも、半分程度ではあるので、ある程度までは有効だとも言えるだろう）。

#### 4－3 「2ch」における集合行動の実例

最後に、この問題について、筆者が経験した具体例を2点示す。集合行動形成の失敗例と、成功例といえそうなものである。

第一の例として、2009年7月末に、「2ch」のあるスレにおいて、ある書物のAmazonでの購入キャンペーンが発生した。当該スレは、原子爆弾関連のスレであり、その関連でしばしば言及されていたある一般的な書物を、広島への原爆投下の日付である8月6日午前8時15分に、

参加者が Amazon で一斉に購入し、社会的メッセージとして、当該書の売り上げランキングを上昇させようという呼びかけだった（詳細はあえて略して記述している）。

筆者はたまたま親族に広島原爆の関係者がおり、このスレの動きを追っていた。当該書を購入してもよいと考えていたので、参加型観察の一助にと、指定の日時に購入ボタンを押すことに決めた。当然ながら、その前後の「2ch」の当該スレへの書き込みもチェックしつつけていた。

結果は「大はずれ」で、その時の購入者数はごく少なく、キャンペーンは不発に終わった。当該スレには、しばらく後に「あれあれ、大失敗」といった書き込みが若干あっただけで、特に何のフォローもなしにスルーされ、購入イベントは終了した。関連スレにも勢いがなくなり、やがてスレ自体が終息した。典型的な失敗した集合行動といえるものだった。この事例が示しているのは、やはり、匿名掲示板における合意、世論形成、集合行動形成の困難性だと言いたいようがない。「誰が」「どのように」参加・不参加だったのかが不明では、賞罰の圧力も弱いため、萌芽的な集合行動（当該スレへの事前の書き込みと話題の盛り上がり、一定数の同意する書き込みなど）が、具体的な結果を伴う社会運動的な活動へと組織化されることは困難である。一冊 1000 円ほどの本ですら購入させることは難しい。ほとんど集合行動論のテキスト通りの結果だろう。

第二の例は、いっそう大規模で、結果的に成功したものだが、その発端は「2ch」への書き込みにあり、その後ネット上で拡散した、義援金募集の寄付活動に関するものである。

2013 年 11 月 7 日、台風 30 号によってパラオ共和国の北部が襲撃され、大統領は 10 日間の非常事態宣言を発した。その後の調査で、復興には 1000 万米ドル近くが必要だとされた。

この報道が流れると、以下のような義援金募集の掲示が、「2ch」の内部に繰り返し流された。

「65 名前:名無しさん@ 13 周年 [sage] :2013/12/03(火)19:30:40.69  
ID: xxx

■台風 30 号パラオ被害状況と義援金受付開始について [2013.11.19  
更新]

今月上旬に発生しフィリピンに大きな被害を与えた台風 30 号（英語名：ハイエン）は、パラオ北部地域のカヤンゲル島（人口 70 名弱）等に大きな被害をもたらしました。幸い死者は出ておりませんが、被害にあった箇所の復旧まで時間を要します。[中略、筆者]

在京パラオ大使館は、台風 30 号の被害に対する義援金の受付を開始することを決めました。

（以下、義援金送付先および当該国大使館の連絡先の情報）」

この情報は、「2ch」およびネット上で何度か再報され、義援金総額の間接発表のためのスレも立てられた。結果的に、翌年 2 月 1 日、当該国駐日大使からのメッセージがネット上で公開され、草の根の義援金が総額 4000 万円超（参加者数 4000 人超）集まったことが告知され、義援金口座が前日に閉ざされたことが宣言された。当該国大使からの謝意が示された。

この事例の場合、少数の有志が、まず当該国大使館と連絡を取り、支援先を問い合わせていた。大使館が窓口を開設したので、「2ch」にて上掲の呼びかけメッセージが繰り返し掲載された。この災害および当該国について、在来マスコミで、ある程度まで既報だったことも、呼びかけの信頼性に大きく寄与したはずである。当初、政府による公的対応が大きくなかったことに即応して、少数ながら正式の行動（大使館への照会と、大使館からの反応）が迅速に行われた。このため、ネット上を中心とした募金活動が、約 2 ヶ月間かけて各所へ広まり、上記の結果につながったものだろう。もともと募金応募が、個人的な性格の強い社会行動であることも遠因といえる。前例と比較して、書き込みの拡散範囲がより大きく、外部のマス・メディア報道で既報であり、公的機関と連携して実施され、正当性にも疑念がない、等の条件が大きく異なる。この例は、当初からより公式的である。

このような事例は、他にもときおり「2ch」上で発生している。いずれの場合にも、「それが詐欺などではない確実な証拠が示されること」「募金の当事者が、募金詐欺などを行っていない確実な証拠が示されること」「経過と収支が逐一報告されること」「開始と終了、その間の各種手続きなどについても明瞭に宣言されること」「丁寧かつ誠実な謝辞（簡便・安価でかまわない）が、公式に出されること」などが、おそら

く成功の条件となっている。趣旨に照らして適正な使途明細が事後報告されれば、以後の信頼度はさらに高くなる。

「2ch」上では、匿名性の前提が、かえってこれらの条件を阻害することから、各種の工夫がなされている。個人が実施した別の募金例では、「数日ごとに、募金先口座の銀行預金通帳の当該ページを撮影して、その画像をアップする」とか「最終的に、全額が寄付先に送金されたことも、同様の手法で証明しようとする」といった手法すら取られている。そしてしかも、その当事者自身は、「2ch」上では匿名であり続けている<sup>7)</sup>。

21世紀は、慈善事業や寄付行為が重要な焦点になる時代だ、などと言われて久しい。一定程度の生活の必要が満たされたあと、人間が何よりも求めるのが「尊厳」であると言われる。南アジアの時給20セントの若年労働者ですら、労働条件の向上と同等程度に、それを求めている。慈善や寄付は、尊厳欲求を満足させる明瞭手段のひとつであり、条件さえ許すならば、貧困層といえる人々であっても、それに参加しようとする。このような現代の精神風土を背景に成功した事例であるから、これらを「2ch」における世論形成や集合行動の成功例とまで呼んでよいかどうかは留保したい。ただし、このような場合には、「ネットを介した集合行動や世論の成立」の可能性が認められるとは言えるだろう。

## 5. 結語

扱いきれなかった論点として、集合行動に関する近年の展開としては、クラーク・マクフェイルによる「発狂した群集という神話」の指摘などがある (McPhail, 1991)。マクフェイルは、「群集」という単一の集合体は存在しないとし、物理的に集合していても、それは単一の群集ではなく、むしろ、多数の、目的や動機を異にする個人と、数人からなる公的集まり public gatherings との、混在した集合体だという。もし類似のことが、物理的集まりではない「2ch」にも言えるなら、「様々な単独者および集まりの、その集合体としての掲示板」を、研究対象に再指定すべきだろう。本論でも、部分的にはこれを意識した。

ネット上での私人たちによる私的な「犯人探し」「被疑者の情報晒し」などの調査的な活動についても、多くの批判が語られている。また他方

では、内部通報や公益通報の必要性が論じられている現実もあるが、これらはあまり結びつけて検討されていないようだ<sup>8)</sup>。

このような論点をはじめとして、論じきれなかった話題はまだある。機会があれば、それらを再度検討したいと考えている。

とかく批判的に語られる匿名の掲示板であり、部分的には無理もない側面があるとも思える。とはいえ、このような掲示板であるからこそ語られうるような、以下のごとき、理解の仕方によって与える印象も対処の仕方も全く違って来る、インパクトの強い書き込みと遭遇することもままある。これもまた、寄付をめぐっての書き込みである。

「495 名前:名無しさん@12周年:2012/xx/xx ID:xxx 余命半年なんで三百万振り込んできた」

これは、単純な事実かもしれず、誇張かもしれず、振り込め詐欺めいた促進活動かもしれない。確実に言えるのは、このような他人の言葉に遭遇することは、以前にはほとんどなかったことだろう。「2ch」上には、多くの聞かれるべき言葉が書き込まれていることもまた事実なのであり、筆者は、それらとの対話を試みてきたと考えている。

\*本論を準備するにあたり、インターネット巨大掲示板「2ちゃんねる」の皆様に変えお世話になりました。記して深謝します。

## 註

- 1) 本論は、過去5年以上にわたって構想されていた筆者の「2ちゃんねる論」のうち、比較的完成している部分のみを、要約的に論文化したものである。そのため、実際の執筆年は、2009年頃から現時点まで、やや長期間にわたっている。当初は、この主題で1冊としてまとめる計画であったが、筆者の多忙や出版状況の困難などの原因で、全体を執筆し刊行する目途が立たないままだった。そうするうちに「2ch」そのものの運営や状況自体までが変化し始めたため、いくつかの重要な論点についてのみ、ここに1論文に纏めて公表することとした。なお本論では、現実の「2ch」への書き込みを具体例として、適宜引用しつつ考察を進める。これらは原則として原文のままであるが、書き込みIDを全て「xxx」とし、議論に無関係な部分は省略させてもらった。
- 2) これらの基礎データの出典は、<http://stats.2ch.net/karasu2.cgi> (2011/9/5



- 調査)、<http://www.maido3.com/server/hybrid-tiger/> (2011/9/5 調査) などである。現在では URL アドレスは移動している可能性がある。
- 3) 「2ch」へのアクセス数は各所で公開されているが、ここでは「からす Ver 0.01」、<http://stats.2ch.net/karasu2.cgi> を主に参照してデータを得た (2015 年 3 月に再確認)。
  - 4) これら「カテゴリー」「板」「スレッド」の実態については、「2ちゃんねる専用ブラウザ」(専ブラ) と称される各 OS 対応の専用閲覧アプリケーション (多くはフリーウェア) をインストールすると、一覧表的に表示されるため、通覧が容易になる。「カテゴリー」分類はブラウザによって多少変わる。PC 用の各種「専ブラ」も多いが、iOS 機器用の「BB2C」、Android 機器用の「2chMate」などを筆者は多用している。移動中や手の空いた短時間の主として閲覧用に便利である。
  - 5) 2013 年 8 月に、英国の [theguardian.com](http://theguardian.com) が公開したチャンネル 4 によるビデオ報道によれば、バングラデシュのダッカには、1000 クリック分のアクセス数が数ドルで買える「クリック農場」が存在している。1 人につき 1000 アカウントを持った従業員が、合計 1 万 5000 個のアカウントを切り替えつつアクセスし、クリックを続けることで、大量の望ましいクリック数が購入できるという。URL は以下を参照のこと (2015/3/15 に再調査)。ビデオ「Click Farms: How Some Businesses Manipulate Social Media」<http://www.theguardian.com/media/video/2013/aug/02/click-farms-social-media-video> 同様のネットアクセス代理業は各所に実在している。
  - 6) ネット上での匿名の書き込みの場合、その意見の「メディア特性上の信憑性」ということも、本来ならば考察されるべきことであろう。立腹した相手に対して、思わず、「殺してやる」と口にしてしまったとしても、その他の各種の情報から、「思わず口が過ぎた、言いすぎた」などで、帳消しにされることがなりうるだろう。他方で、同一の情報内容を、手紙に筆記して郵送したら、これはいっそう重大な脅迫文であり、そのように対処されることが多いだろう。総じて、書き言葉は話し言葉に比して、いっそう公式性・契約性が強いとみなされるが、「2ch」の場合、そもそも「話し言葉」と「書き言葉」の中間的な性質をもった「書き込み (と便宜的に読んでいる)」だろう。「考えずに反射的に書き込んでいる」といった感慨も多く書き込まれている。このために、あたかも「罵倒する話し言葉」のごとく、書き込みが無意識に極端化しやすいと推測される。「2ch」とは、そもそも「文字表現なのか、座談会の書き起こしなのか、実は自記記録付きの談話ではないのか」などの問題が検討されるべきだと考えている。
  - 7) 「2ch」では、ときおり、「裸祭り」などと称される行動が活発化することがある。特定の手続きによって、書き込みをした PC の IP アドレスが調べられるように、自主的に情報開示することである。といっても、書き



込み PC の IP アドレスが晒される程度であるが、興味深い行動選択ではあるだろう。

- 8) 民間調査・捜査という話題では、サービンら編集の論文集が参考になる (Sarbin et al., 1994)。また、作家の江戸川乱歩らが、終戦間もない昭和 22 (1947) 年に「探偵作家クラブ」を発足させた際、その目的に、「犯罪科学の研究を行い、兼ねて犯罪防止の諸施策に貢献せんことを期する」とうたった事実があり、民間協力の実例としてよく話題にされる。当時の新聞報道では、「新憲法が実施されて民衆の協力が今後犯罪捜査にも大きな役割をはたすことになったので、日ごろのウチクを大いにかたむけようと乗り気になった次第」などと書かれたと、当人が記録している (江戸川、2006、261-262 頁)。

## 参考文献

江戸川乱歩、『探偵小説四十年 (下)』、光文社、2006。

後藤将之、「世論」、大坊・安藤・池田 編『社会心理学パースペクティブ 3』、95-112 頁、誠信書房、1990。

後藤将之、「ハーバート・ブルーマーの社会心理学」、同訳『シンボリック相互作用論』271-314 頁に収録、勁草書房、1991。

後藤将之、「社会の情報化とメディア」、宮島喬 編『現代社会学 改訂版』、183-205 頁、有斐閣、2005。

McPhail, C., *The Myth of the Madding Crowd*, Aldine Transaction, 1991.

中山信弘、『著作権法』、有斐閣、2007 (第 2 版、2014)。

Sarbin, T. R., Carney, R. M., and Eoyang, C. (eds.), *Citizen Espionage: Studies in Trust and Betrayal*, Praeger Pub., 1994.

吉原健一郎、『落書というメディア——江戸民衆の怒りとユーモア』、教育出版、1999。

## 追記

本調査を実施していた期間、「2ch」には、下記のような引用を許可する文言が明示されており、本論はそれに依拠して執筆された。「2ちゃんねるのデータの利用に関して、原則的に自由ですが、2ちゃんねるのデータ自体を利用して対価を取る行為はご遠慮下さい。」<http://www.2ch.net/precautions.html> (2012 年 11 月 24 日検索)